

羽根井遺跡 (I)



鼈を使った祭祀

2004年3月



株式会社

スギ薬局

豊橋市教育委員会



調査区全景



1. SK-3 甕出土状況-1 (西から)



1. SK-3 甕出土状況-2 (西から)

はねい
羽根井遺跡 (I)

2004年3月



株式会社

スギ薬局

豊橋市教育委員会

例 言

1. 本書は、豊橋市花田町字後田18-1他において、店舗建設のための土地造成に伴う記録保存を目的に、株式会社スギ薬局が委託者、豊橋市教育委員会が受託者となって実施した羽根井遺跡の発掘調査報告書である。調査期間は平成15年9月16日～10月3日、調査面積は250㎡、調査担当は岩原剛（豊橋市教育委員会教育部美術博物館）である。
2. 報告書の作成にあたり、遺構、遺物の実測・トレース等については、小出豊、鋤柄美佐子、田中道恵、徳倉まり子、永持優子、補永亨代らの援助を受けた。写真撮影については、遺構・遺物ともに岩原が行ったが、航空写真については株式会社大地コンサルタントの提供を受けた。
3. 本書の執筆及び編集は、岩原が行った。
4. 調査区の座標は、建設省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、これを示した。本書に使用した方位はこの座標に沿うものである。遺構・遺物のスケールはそれぞれに明示した。写真の縮尺は任意である。
5. 本調査に当たって作成した写真・カラースライド・実測図等の記録や出土遺物は、豊橋市教育委員会において保管・管理している。

目次

第1章 調査の経緯と経過	
1. 調査にいたる経緯	1
2. 調査の経過	2
第2章 遺跡の立地と歴史的環境	
1. 遺跡の立地	4
2. 歴史的環境	4
第3章 確認調査	
1. 各トレンチの状況	7
2. 遺物	7
第4章 本調査	
1. 遺構	9
2. 遺物	16
第5章 まとめ	21
報告書抄録	22

挿図目次

第1図	調査地位置図 (1/2,500)	1
第2図	調査区の設定 (1/500)	2
第3図	周辺遺跡分布図 (1/15,000)	6
第4図	試掘トレンチ実測図 (1/50)	8
第5図	試掘調査出土遺物 (1/4・銭貨は1/1)	8
第6図	遺構平面図-1 (1/200)	10
第7図	遺構平面図-2 (1/100)	11
第8図	遺構平面図-3 (1/100)	12
第9図	SK-3 出土状況図 (1/20)	13
第10図	遺構実測図 (1/40・1/80)	15
第11図	本調査出土遺物-1 (1/4)	17
第12図	本調査出土遺物-2 (1/4)	18
第13図	大西遺跡の廳を使った祭祀 (1/50)	21

表目次

第1表	確認調査出土遺物観察表	20
第2表	本調査出土遺物観察表	20

写真図版目次

カラー

写真図版1 調査区全景

- 2-1 SK-3 廳出土状況-1 (西から) 2 SK-3 廳出土状況-2 (西から)

モノクロ

写真図版1-1 調査区北東角付近 (北西から)

- 2-1 SK-3 廳出土状況-1 (東から) 2 廳出土状況-2 (西から)

- 3-1 SE-2 (北から) 2 SE-3 (南から)

- 4 出土遺物-1

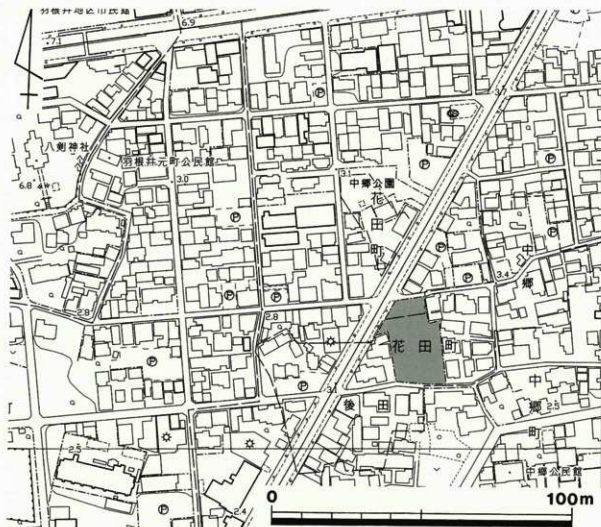
- 5 出土遺物-2

第1章 調査にいたる経緯と経過

1. 調査にいたる経緯 (第1図)

羽根井遺跡は、平成10年度に実施された市内遺跡詳細分布調査によって発見された遺跡である。遺跡付近は豊橋駅に近く、すでに宅地化が進んでいる。また今回の調査地の西側には県道大山一停車場線が通るなど交通の要所となっていて、市街化が著しい地域でもある。このような市街地にわずかに残された畑や未舗装の住宅敷地などで古墳時代から近世にいたる遺物が採集された。

そうした中、平成15年5月に羽根井遺跡の範囲内である豊橋市花田町後田18-1他において、店舗建設のための造成計画が持ち上がった。豊橋市教育委員会は土地所有者である(株)中部電力及び施工業者である大和ハウス株式会社と協議を進める中、6月4日付けで、埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについての照会が市教育委員会あてになされた。そこで8月18・19日の両日で確認調査を実施し、9ヶ所のトレンチを設けて遺構・遺物の確認につとめた。



第1図 調査地位置図 (1/2,500)

確認調査の結果、開発対象地には遺構が良好に遺存していることが判明し、特に敷地の北側付近に位置する確認トレンチで古代の遺物がまとまって出土した。そこで埋蔵文化財の取り扱いについて協議を進めた結果、店舗造成部分のうち、基礎工事及び看板設置などによって掘削工事を行う部分のみを対象に、記録保存を目的とした発掘調査を行うこととなった。また発掘調査は(株)中部電力より借地をし、店舗建設を実際に行う(株)スギ薬局が原因者となって費用を負担することで合意した。そして7月29日付けで(株)スギ薬局より埋蔵文化財発掘の届出が愛知県教育委員会教育長あてになされた。

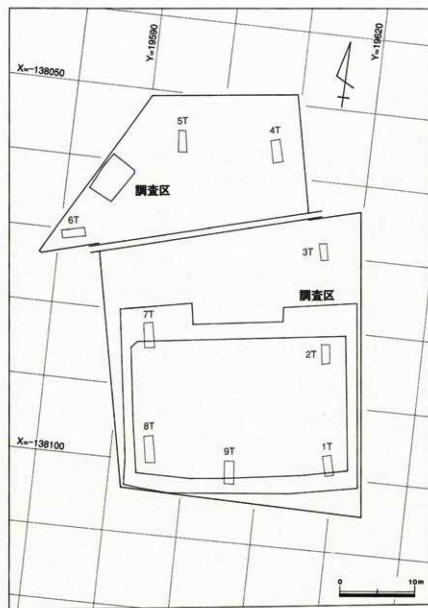
こうして、9月10日付けで委託者を(株)スギ薬局、受託者を豊橋市として、発掘調査の委託契約が締結された。続く9月16日には現地調査に着手した。

2. 調査の経過

建設される店舗は周囲に大型の鉄骨製柱を据え、内部には柱を設けず空間を広く取る構造である。このため発掘調査は遺構が影響を受ける店舗の基礎及び看板の基礎部分のみを対象にした。その結果調査区は幅2～4.5mで20×31mの長方形に一周するような変則的な形状と、5×3.5mの小規模なもの2ヶ所になった。したがって、遺構の性格、特に柱穴の配列から建物の数と位置を把握するなどは困難で、現地作業による評価が十分行えたとは言い難い。

まず、重機を用いて表土の掘削を行った。調査地はもとは変電所の跡地であり、その撤去後にはアスファルトで舗装されていた。まず調査地のアスファルトを除去し、続いて表土の除去を行った。

次に基準点の設置を行った。国家座標ののちって10mグリ



第2図 調査区の設定 (1/500)

ットになるよう設置したが、無論幅2～4.5mの調査区であっては十分なグリットが確保できるはずもない。その後発掘作業員を投入し、地山面で遺構検出をして略測図を作成し、続いて遺構の掘削作業に着手した。作業は調査地の北東角から西辺、南辺、東辺、北辺と調査区を1周するかたちで進めていった。

本調査の結果古代の遺構はあまり確認されず、一方で中世～近世の遺構が多く検出された。遺構の主体をなすのは掘立柱建物跡の柱穴で、そのほか井戸、溝、大型廃棄土壌などが検出された。遺構は北東部分に集中する傾向が認められ、調査は終盤に至って佳境を迎えたと言えるだろう。

グリットごとに遺構の掘削を終えた時点で、遺構実測図を作成した。また一部の遺構は遺物の出土状況図を作成している。さらに各遺構の近接写真を随時作成した。最後に高所作業車を使用して上空からの写真撮影を実施し、10月2日に現地作業を終了した。これに引き続いて店舗建築工事が着手され、平成16年1月には店舗が完成し、営業を開始した。

現地作業の終了後、室内での整理作業に着手した。遺物の洗浄、ネーミング、接合作業を進め、報告書掲載のための遺物選択を行い、実測図を作成した。さらに版組み・トレース作業を行うとともに執筆作業を進め、3月31日付けで報告書を刊行した。またこれをもってすべての業務が終了し、委託契約を完了させた。

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地

豊橋市は豊川下流の左岸にあり、市域の地形は西南日本外帯の三波川変成帯に属する弓張山地、河岸段丘、および豊川と中小河川によって作られた沖積平野とに大別することが出来る。このうち河岸段丘は、豊川と旧天竜川によって形成され、高位・中位・低位の3面に分けられる。

羽根井遺跡は低位面に立地する。低位面は豊橋面とも呼ばれ、標高は3~10mで、豊川系の扇状地性堆積物である豊橋礫層からなる。遺跡が所在する付近は低位面のうちでもⅢ面に分類される、標高4m前後のところで、柳生川によって形成された沖積低地(三角州性の谷底平野)に向って緩く傾斜する。ちなみに柳生川の谷底平野は羽根井遺跡付近で幅約700mを測り、羽根井遺跡の対岸の段丘上には弥生時代中期と中世を主体とする集落遺跡・橋良遺跡が存在している。

羽根井遺跡付近の地形を詳細に見ると、低位面Ⅲ面が南側の沖積地に向って三角形に張り出した部分があり、ここに羽根井遺跡が立地している。柳生川の河口からは比較的距離があること、さらに段丘の端部に所在し湧水などに恵まれていることから、集落を形成する上では好条件の場所といえるだろう。遅くとも近世以降には、遺跡周辺の谷底平野は水田として利用されていたと推定される。一方で、柳生川が川幅を広げていたころは、この付近に船着きなど小規模な港が存在したことは十分考えられる。

羽根井遺跡における集落の形成と発展は、柳生川とのかかわりの中で理解するのが最も適当である。

2. 歴史的環境 (第3図)

ここでは、羽根井遺跡をとりまく周辺の遺跡について、特に柳生川の谷底平野をはさむ形で所在する南・北側の段丘上に展開する遺跡群を中心に、時代を追って説明する。

縄文時代 柳生川河口の北側にある段丘は、さらに北側を豊川の沖積低地に画されるかたちで西に向って延びている。段丘の先端は三河湾に面しており、ここでは遅くとも縄文時代後期から貝塚が営まれていた。大西貝塚は東海地方最大の規模を誇る大貝塚で、おもに晩期に形成された。貝塚を構成する貝の種類がほとんどハマグリで占められること、生活用の石器類の出土が極めて少ないこと、さらには多数の炉跡が検出されたことなどから、干し貝加工を専業としたハマ貝塚であったと推定されている。付近には水神貝塚、市杵嶋神社貝塚、さんまい貝塚など晩期を主体とする貝塚がいくつか確認されている。

弥生時代 羽根井遺跡から見て柳生川の谷底平野をはさんだ対岸の段丘上に、弥生時代中期を主体とする集落遺跡の橋良遺跡がある。過去に5回の本調査が行われ、古井式期・長床式期の方形周溝墓や長床式期の堅穴住居址、同じく長床式期の環壕などが確認された。現状では調査があまり進展しておらず、集落構造の解明はまだまだ先と思われるが、弥生時代中期の拠点集落として柳生川流域のみならず東三河地域を代表する遺跡のひとつである。

古墳時代 豊橋市域の太平洋沿岸、特に河口部には古墳時代の有力古墳が点在している。かつて半島状に三河湾に向って伸びていた段丘の先端に所在する市杵嶋神社古墳は、全長約60mと推定される前方後方墳である。くびれ部からは茶臼山型の二重口縁壺や底部穿孔土器が出土しており、古墳時代前期初頭の築造と推定される。また6世紀以降、三ツ山古墳、車神社古墳、妙見古墳、磯辺王塚古墳、牟呂王塚古墳と続く前方後円墳（磯辺王塚古墳は墳形不明）は温美湾沿岸部の首長墳系列と位置づけられるもので、金銅装馬具や飾大刀など豊富な副葬品が出土している。

一方、集落址は十分な調査が行われたとは言えない状況である。橋良遺跡では堅穴住居址から在地系の広口壺とともにS字甕（C類）、山陰系の甕、畿内系の大型高坏が共伴して出土しているほか、前期の遺物は大西貝塚の貝層などから確認されるに過ぎない。中期では見丁塚遺跡で住居址から土師器・須恵器が出土している。後期になると大西遺跡や公文遺跡などで6世紀代の遺構が散見されるようになり、やがて終末期である7世紀には、掘立柱建物跡を主体とする大西遺跡が出現する。建物には総柱建物や側柱建物、大壁造の可能性がある特殊建物などがあり、遺物には須恵器や土師器のほか鉄鎌などがある。豊川河口部の中心集落のひとつと考えられ、後述する市道遺跡の前身に想定される。

古代 市道遺跡は古代の豪族居館とその私寺に想定されている寺院址（市道廃寺）からなる遺跡である。豪族居館はすべて掘立柱建物からなり、六角形建物や倉庫と考えられる総柱建物が軒を連ねていた。また寺院址は内外二重の区画が存在し、内部からは金堂、講堂、僧坊と考えられる建物跡が検出され、須恵器の金属製仏器模倣品、「寺」と墨書された灰釉陶器、瓦塔、仏像の螺髪、大量の瓦などが出土している。さらに市道廃寺に瓦を供給したロストル式の瓦窯2基が検出されている。

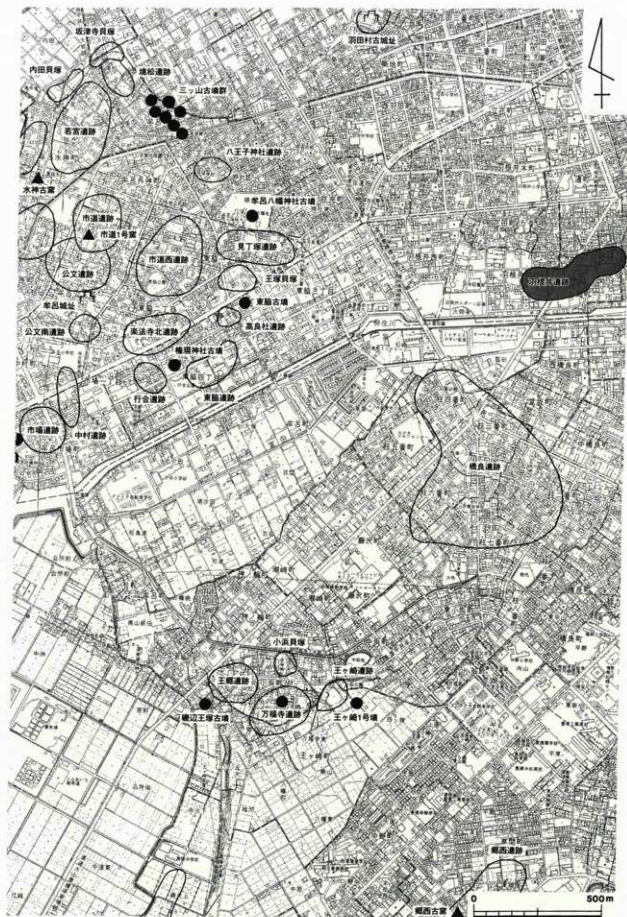
このほか羽根井遺跡の西側に連なる段丘端部に沿って、高良社遺跡、楽法寺北遺跡、東脇遺跡、行合遺跡などの古代の集落が存在している。市道遺跡を含め、柳生川河口部の北岸一帯は古代の遺跡が集中する地域である。

中世 橋良遺跡では12～13世紀の掘立柱建物跡をはじめ、屋敷地の区画溝などが検出され、広範囲に中世集落が広がっていると判明した。中世陶器のほか輸入磁器である青磁や白磁が出土している。橋良遺跡は伊勢神宮領として「嘉永三年（1108）注文」に表れる橋良御厨に比定されるところである。また公文遺跡は大溝を伴った豪族居館とその周辺集落で、12～13世紀を主体とする遺物が認められる。牟呂城址は牟呂兵庫もしくは鶴殿兵庫の城と伝えられる戦国時代の方形郭郭の城で、当時の主要港湾であった牟呂津を抑えた要衝の地であったと推定される。

近世 近世の遺構は、発掘調査の進んだ牟呂地区をはじめ、橋良遺跡、王郷遺跡など、発掘調査を実施したすべての遺跡で確認されている。近世には現集落の基礎とも言える景観が生み出されていたのだろう。付近の近世集落の特徴として、盛んであった貝の採取を反映してか、大量の貝殻が出土することが挙げられる。

参考文献

- 豊橋市教育委員会 1994 「豊橋市埋蔵文化財調査報告書第18集 橋良遺跡」
 豊橋市教育委員会ほか 1995 「豊橋市埋蔵文化財調査報告書第19集 大西貝塚（Ⅰ）」
 豊橋市教育委員会ほか 1997 「豊橋市埋蔵文化財調査報告書第33集 公文遺跡（Ⅲ）・牟呂城址」



第3図 周辺遺跡分布図 (1/15,000)

第3章 確認調査

1. 各トレンチの状況 (第2・4図)

確認調査は、開発対象地となる敷地全体を対象に、遺構の有無及びその年代を把握するために行った。トレンチのサイズは1×2～3mを基本とし、ほぼ調査区の外周に沿って設定している。ほとんどのトレンチで遺構が確認されたが、このうち出土遺物に比較的恵まれたトレンチについてのみ説明する。

1 T 敷地の南東角に設定したトレンチである。地表面から0.55mほどで地山を検出し、遺構が確認できたのは地山面だった。掘立柱建物の柱穴が多数検出されている。

2 T 1 Tの北側に設定したトレンチで、地表面から0.7mほどで地山を検出した。溝もしくは大型土壌と考えられる掘り込みを確認し、内部から戦国時代の遺物の細片が出土した。

4 T 敷地の北東角に設定したトレンチで、地表面から0.75mほどで地山を検出した。大型で規模の大きな土壌と考えられる遺構が検出され、内部から古墳時代終末期、7世紀後葉と考えられる遺物が出土した。なお、土層中に見られる5. 暗灰色砂質土層はレンガ片及び大量の炭を含むが、この層は確認調査及びその後の本調査によって敷地の北側一帯に認められることが判明した。豊橋空襲時の灰塵の一部ではないかと地元の方からの指摘を受けている。

5 T 敷地の北端に設定したトレンチで、地表面から0.8mほどで地山を検出した。地山の直上には厚さ30cmほどの遺物包含層があり、7世紀後葉と考えられる遺物が多数出土した。

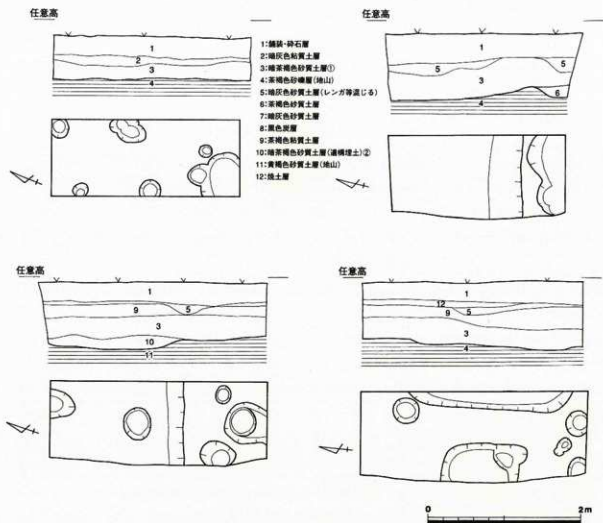
トレンチの状況から、敷地内のもとの地形は南側がやや低く、北側に向けて緩やかな下り傾斜となっていることが判明した。

2. 遺物 (第5図、第1表)

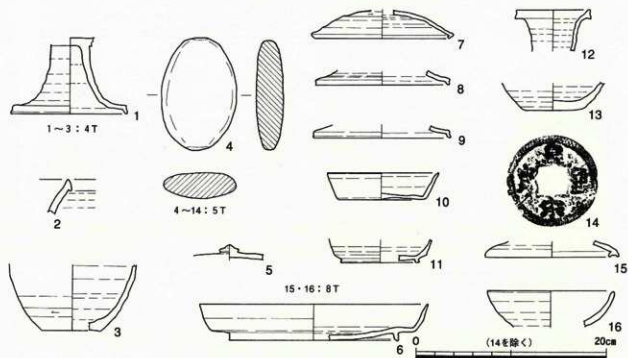
4 T出土遺物 (1～3) 1は高坏の脚部、2は壺の口縁部、3は壺の体部である。1は端部の外面に面を持ち、2は端部を折り曲げて口縁帯をなす。3は肩が張った体部と考えられ、低部は高台を持たずに平坦である。いずれも湖西窯の製品で、8世紀のものである。

5 T出土遺物 (4～14) 4は叩石で、両端に敲打のための使用痕が認められる。5～13は須恵器である。5、7～9は坏蓋で、5には扁平鈕が付く。また7～9は端部を折り返し、すでに返りを持たない段階のものである。6は有台皿で、大型の坏形を呈している。10・11は坏で、10は高台を持たないいわゆる箱坏である。12・13は壺で、12は口縁部をラッパ形に開き、端部には面を持つ。13は底部付近である。以上の遺物は地山直上の包含層中から出土している。これらはいずれも8世紀のものである。14は銭貨の皇宋通寶で、孔の各辺にはひとつづつ抉り込みが見られる。

8 T出土遺物 (15・16) 8 Tは敷地の南西角に設定したトレンチで、遺構は少ない。15・16ともに須恵器で、15は内面に返りを持つ坏蓋、16は高坏の坏部である。15は7世紀中葉に位置付けられる。



第4図 確認トレンチ実測図 (1/50)



第5図 確認調査出土遺物 (1/4・銭貨は1/1)

第4章 本調査

1. 遺構 (第6～10図)

本調査は、店舗の基礎部分と看板設置部分を対象としている。確認された遺構には井戸、溝、土壌、柱穴などがある。このうち溝は屋敷地を区画するものと考えられ、また土壌は廃棄土壌が主体である。柱穴は屋敷内を構成する掘立柱建物に伴うものだが、配列から建物位置を特定できたところは無かった。特筆すべき遺構として、古墳時代後期(7世紀中葉)の須恵器の甕1点が出土した土壌SK-3がある。以下主要な遺構について説明するが、文中の規模は検出面(地山面)での計測値である。

A. 井戸 (第8・9図)

SE-1

調査区の北西角付近で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径0.65m、短径0.52mを測る。完掘はしていない。埋土は暗灰褐色砂礫である。出土遺物には陶器の碗(第11図1)、鉢(2)があり、遺構の時期は19世紀と考えられる。

SE-2

調査区の南東角で検出され、南側は調査区外である。平面形は楕円形を呈すると思われ、長径1.95mを測る。完掘しておらず、崩落のため壁面がオーバーハングしている。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物には山茶碗の碗(3)、青磁の鎮蓮弁文碗(4)、陶器の丸碗(5)、志野丸皿(6)、甕(7)、土師器の鍋(8)があり、3を混入品と考えると、遺構は遅くとも16世紀前葉に掘削され、18世紀初頭まで継続していたと考えられる。

SE-3

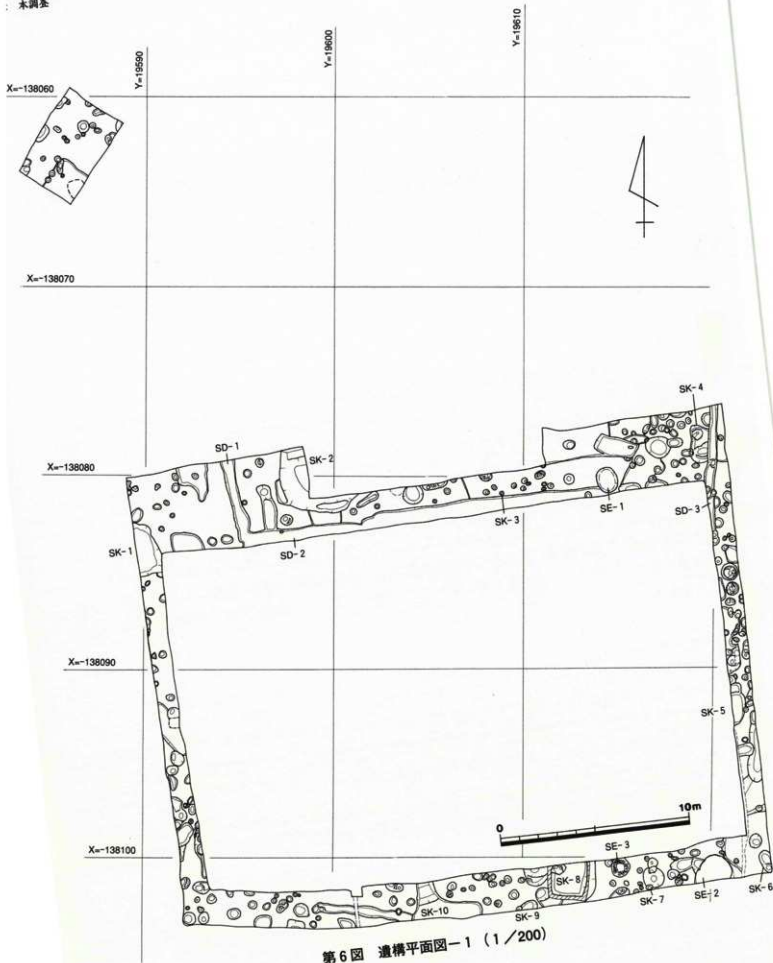
SE-1の西約1mほどのところで検出された、石組み井戸である。完掘していない。石組みの石材にはチャートや花崗岩などが見られ、いずれも角の取れた円礫で、河原あるいは段丘を構成する地山に含まれた石を使用したと思われる。規模は内部の直径0.4mを測る。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物には陶器片などがあり、遺構は近世のものと思われる。

B. 溝 (第7・8図)

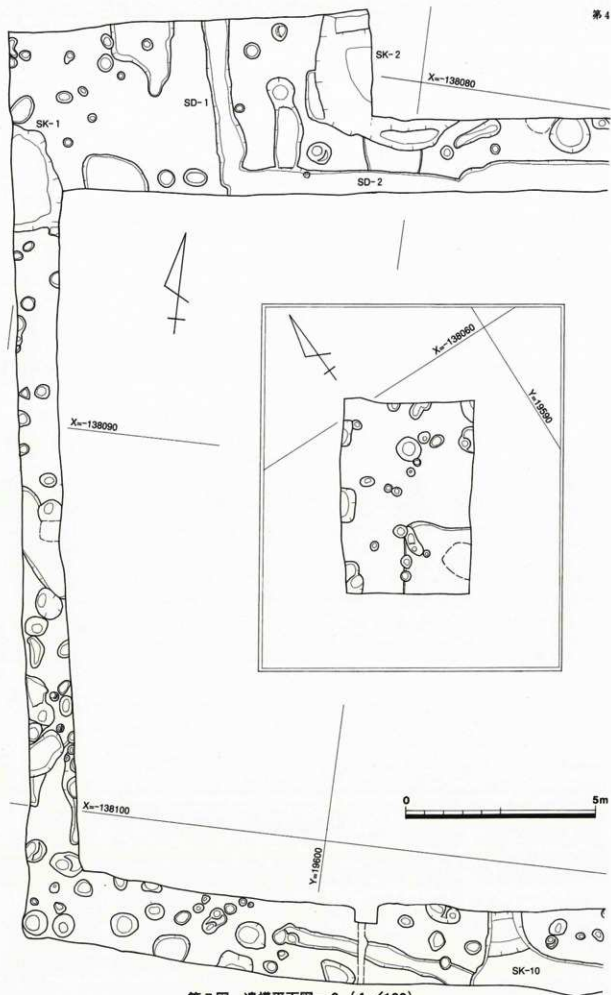
SD-1 (第7図)

調査区の北西角付近で検出された。おおよそ南北に伸びており、調査区の端でSD-2に切られている。規模は幅0.58m、深さ5～8cmを測り、埋土は暗灰褐色砂礫である。出土遺物には山茶碗の碗(9)

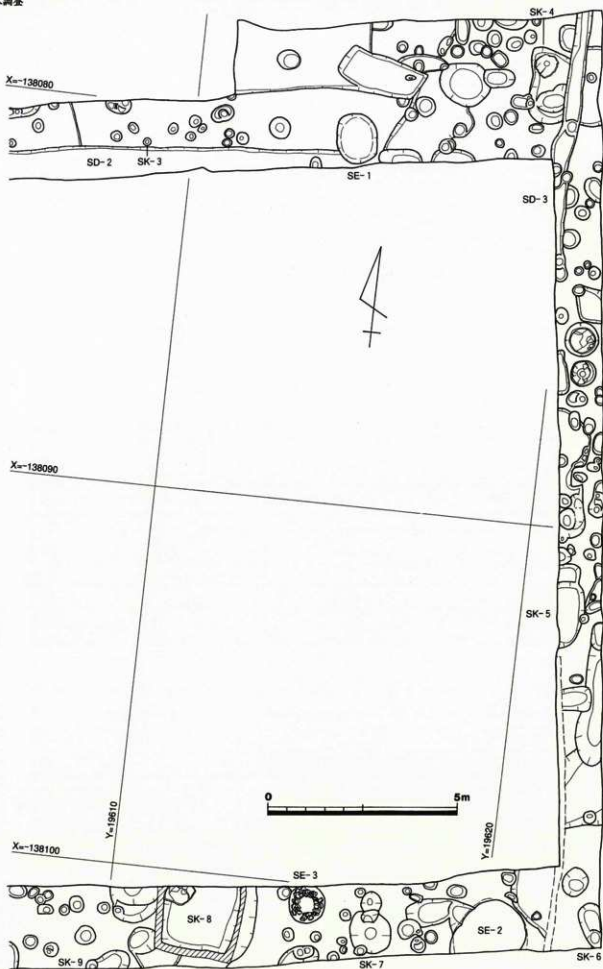
木調査



第6図 遺構平面図-1 (1/200)



第7図 遺構平面図-2 (1/100)



第8図 遺構平面図-3 (1/100)

と須恵器の壺(10)があり、遺構の時期は13世紀ごろと考えられる。

SD-2 (第7・8図)

調査区の端に沿って東西に伸びており、南側の肩は調査区外になるため検出されていない。規模は長さ約20m、深さ5~10cmを測り、埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物には陶器の碗(11~17)、鉢(23)、摺鉢(25)、瓦質土器の鍋(26)などがあり、遺構の時期は19世紀前半と考えられる。

SD-3 (第8図)

調査区の北東角から南北に伸びている。規模は幅0.5m、深さ2~7cmを測り、埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物には陶器の壺もしくは碗(27)があり、遺構の時期は近世と考えられる。

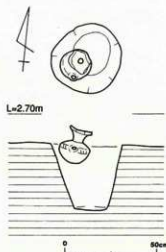
C. 土壌(第7~10図)

SK-1 (第7・10図)

調査区の北西角で検出された大型の土壌で、西側は調査区外になっている。平面形は方形を呈すると考えられ、南北の断面形は台形である。検出された長さ2.8m、深さ75cmを測る。埋土は暗灰褐色砂礫である。出土遺物には陶器の丸碗(28)、皿もしくは壺(29)、鉢(30)、土師器の皿(31・32)、鍋(33)、漆器碗(36)などがあり、遺構の時期は19世紀前葉と考えられる。

SK-2 (第7・10図)

調査区の北側中ほどで検出された大型の土壌で、北東側一帯が調査区外になっている。平面形は不明だが方形の可能性があり、規模は東西の長さ4.1m、深さ80cmを測る。埋土は暗灰褐色砂礫である。出土遺物には土師器の皿(第12図37)、鍋(38)や近世の陶器片などがあり、遺構の時期は近世と考えられる。



第9図 SK-3 出土状況図(1/20)

SK-3 (第8・9図)

調査区の北側中ほどで検出された小ピットである。平面形は円形で、規模は径0.37m、深さ0.35mを測る。埋土は暗灰褐色砂質土である。ここからは古墳時代後期に属する須恵器の甕(39)1点が、底から25cm浮いて出土した。これは偶然的な廃棄品ではなく意図的に埋納されたもので、現状では祭祀遺構と評価する。なお、遺構の性格は第5章でも触れているのでそちらを参照されたい。

SK-4 (第8・9図)

調査区の北東角付近で検出された土壌で、東側はSD-3に切られている。平面形は長楕円形を呈し、中に円形の2つの土壌が

南北に並んで設けられており、北側の土壌には陶器の大甕（常滑）が据え置かれているほか、南側も本来は大甕が据えられていたと推定される。規模は長さ2.0m、深さは最も深いところで45cmを測る。埋土は暗灰褐色砂礫である。恐らく便所遺構と考えられ、大甕のそれぞれが大使用・小使用だろう。大甕の特徴から、遺構の時期は近世と考えられる。

SK-5（第8・10図）

調査区東側の中間付近で検出された土壌で、西側は調査区外になっている。平面形は長楕円形を呈し、規模は長さ2.25m、深さ32cmをそれぞれ測る。底の北側は一段高くなってテラス状になっている。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物には陶器の灯明皿（40）、鬢だら（41）があり、遺構の時期は18～19世紀と考えられる。

SK-6（第8・10図）

調査区の南東角で検出された土壌で、南東側は調査区外になっている。平面形は長楕円形を呈すると思われ、規模は深さ40cmを測る。埋土は暗灰褐色砂質土である。縄文土器片1点が出土しているが、遺構の時期は不明である。

SK-7（第8・10図）

調査区の南東角から6mほど西側で検出された小ピットで、平面形は楕円形を呈し、規模は長径0.32m、短径0.25m、深さ35cmをそれぞれ測る。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物には陶器の摺鉢（43）があり、遺構の時期は16世紀初頭と考えられる。

SK-8（第8・10図）

調査区南側の中間付近で検出された土壌で、北側は調査区外になっている。平面形は方形を呈し、規模は東西2.6m、深さ60cmを測る。埋土は暗灰褐色砂質土である。遺構の側面には黄白色の粘土が厚さ10～15cmほど貼られており、防水処理のためのものと思われるが、遺構の性格は分からない。出土遺物には磁器の染付皿（44・45）、広東碗（46）、白磁の坏（47）があり、遺構の時期は19世紀前葉と考えられる。

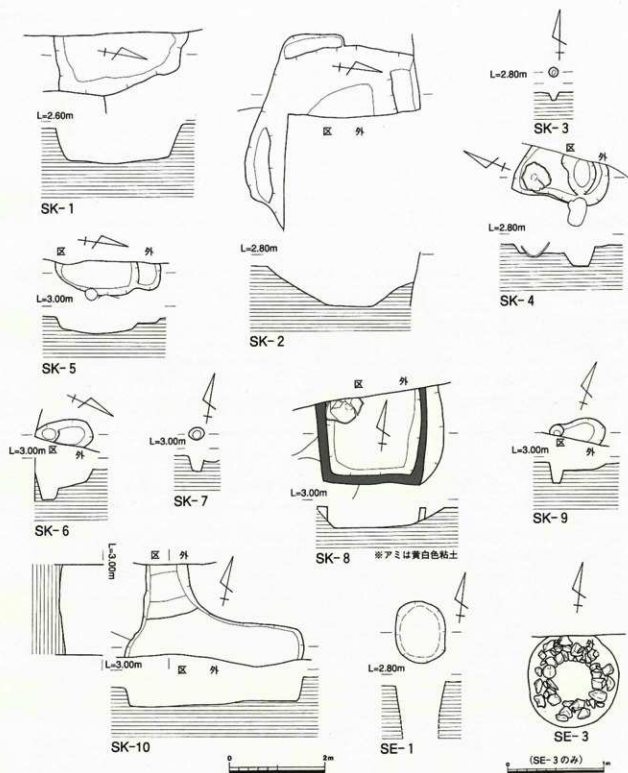
SK-9（第8・10図）

調査区の南側中間付近で検出された土壌で、南側は調査区外になっている。平面形は不整な長楕円形で、規模は深さ20cmを測る。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物には土師器の皿（48）があり、遺構の時期は15～16世紀と考えられる。

SK-10（第7・10図）

調査区の南側中間付近で検出された土壌で、北側と南側が調査区外になっている。平面形はL字形を呈し、方形の土壌の北側に張り出しを設けたような印象を受ける。規模は東西3.8m、深さ55cmを測

る。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物はないため、遺構の時期は不明である。



第10図 遺構実測図 (1/40・1/80)

2. 遺物 (第11・12図)

遺物は古墳時代後期(7世紀中葉)から近世のものまで出土している。主体となるのは近世の遺物で、次いで戦国時代の遺物が多い。付近は近世を主体とする集落であったが、その始まりは戦国時代まで遡るのだろう。以下、各遺構ごとに主要な遺物を説明する。

SE-1 (1・2)

1・2ともに陶器である。1は碗で、内外面には灰釉が施される。2は鉢で、内面には櫛状工具による緩やかな波状文が見られる。また内面には銅緑釉が掛かる。2は連房Ⅳに比定される。

SE-2 (3~8)

3は山茶碗の碗で、高台付近のみが遺存している。高台のみ暗灰色を呈しているが、これは近在する橋良東郷古窯の製品に認められる特徴である。渥美窯のⅠ期に位置付けられる。4は輸入磁器(青磁)の鎚蓮弁文碗で、ヘラを用いて削りだした鎚の下端がわずかに観察される。5~7は陶器である。5は瀬戸美濃の丸碗で、内外面に鉄釉が施される。大窯製品だろう。6は瀬戸美濃の志野丸皿で本業焼Ⅱ段階のもの。7は常滑の甕でⅠ期に比定される。口縁部の内側はわずかに角張る。8は土師師の鍋で、いわゆるくの字鍋である。戦国時代のもの。

SD-1 (9・10)

9は山茶碗の碗で、高台付近である。高台の形状からⅢ期に属する。10は須恵器の壺で、強く外反し、端部は断面三角形を呈する。

SD-2 (11~26)

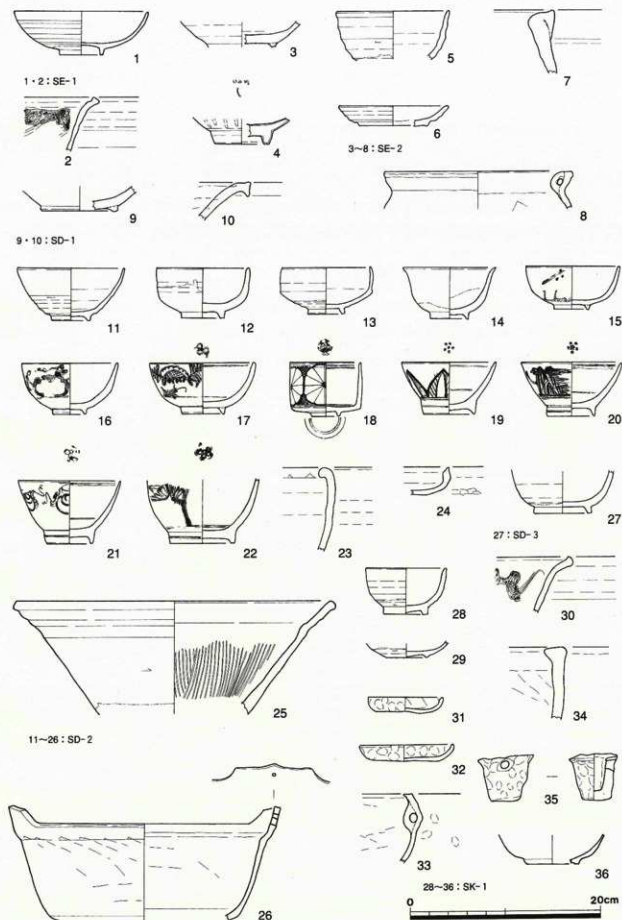
11~14は瀬戸美濃窯産陶器である。11は丸碗で、内外面に灰釉を施す。12は腰鎚碗、13は腰折碗、14は端反碗である。11は連房Ⅴ、12・13は連房Ⅲのもの。15~17は陶胎の染付である。18・19は磁器の染付碗で、18は筒茶碗、19は広東碗である。20~22は陶器の広東碗である。いずれも連房Ⅳ~Ⅴに比定される。23は瀬戸美濃窯産陶器の鉢、25は摺鉢で、本業焼Ⅲ段階に比定される。24は土師師の焙烙である。26は瓦質土器の鍋で、把手がつくところは圭頭形に作り出す。内外面に板ナアの痕跡が良く残る。

SD-3 (27)

27は陶器で、瀬戸美濃の壺と思われるが、碗の可能性もある。内外面に鉄釉が施される。

SK-1 (28~36)

28~30は瀬戸美濃窯産の陶器である。28は丸碗で、内外面には灰釉が施される。29は皿もしくは壺の底部である。30は鉢で、内面には櫛状工具による緩やかな波状文が描かれるほか、斑点状に銅



第11図 本調査出土遺物-1 (1/4)

緑釉が落とされる。いずれも連房Ⅳのものであろう。31～35は土師器である。31・32は手づくね調整された皿で、外面には指頭圧痕が明瞭に見られるほか、31の内面には板ナデ痕がある。33は鍋で、いわゆる半球形鍋である。内面は板ナデ調整される。34は土師質の鉢で、口縁端部は平坦面になる。35は鉢の脚と考えられ、三足のうちのひとつであらう。外面には指頭圧痕が明瞭で、外面から穿孔がなされている。36は漆器碗で、高台は低い。内面には赤漆が、外面には黒漆が塗られている。

SK-2 (37・38)

37・38はいずれも土師器である。37は皿で、底部外面は指押さえ、口縁部はヨコナデされる。38は鍋で、いわゆるくの字状口縁鍋の口縁部片である。口縁端部は外側に折り返す。

SK-3 (39)

39は須恵器の 甕である。口縁部が欠損するほかはほぼ完存しており、当初から完形品で土壌内に埋納されていたものだろう。体部外面の中心には櫛状工具による連続した刺突文があり、注口部を突出させ、低部は回転ヘラケズリされる。上面には自然釉が掛かっている。湖西窯産である。

SK-5 (40・41)

40・41は瀬戸美濃窯産の陶器である。40は灯明皿で内外面に長石釉が施される。41は鬘だらいで、側面には型紙を使用した鉄絵が見られる。連房Ⅲ～Ⅳに比定される。

SK-6 (42)

42は縄文土器片である。外面には沈線文が見られる。



第12図 本調査出土遺物-2 (1/4)

SK-7 (43)

43は瀬戸美濃窯産陶器の摺鉢である。内外面に鉄釉が施される。大窯第1段階に比定される。

SK-8 (44~47)

44~47はいずれも磁器である。44・45は染付の皿で、44の内面には菊花が、45は山水画が見られる。46は広東碗で、本業焼のⅢ段階に比定される。47は白磁の坏である。

SK-9 (48)

48は土師器の皿である。底部外面には指頭圧痕が見られ、また口縁部はヨコナデされる。口縁端部は上方に引き出されるかたちでわずかにとがる。

表土 (49~52)

49・50は山茶碗の碗である。49は高い高台を持つ。49はⅡ期、50はⅢ期に比定される。51は硯である。墨胴から落潮にかけて明瞭な使用痕が認められる。52は常滑窯産陶器の壺である。口縁部は内湾しながら外上方へ向け立ち上がり、端部は外側へ折り返して断面三角形に肥厚させる。近世のものである。

参考文献

※遺物の時期比定は以下の文献によった。

山茶碗：藤澤良佑 1994 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター

古瀬戸：(財)瀬戸市埋蔵文化財センター 「研究紀要」第5輯

瀬戸美濃大窯製品：藤澤良佑 1994 「瀬戸・美濃大窯の編年」『瀬戸市史 陶磁史篇4』

近世陶器：瀬戸市教育委員会 1990 「尾呂」

常滑：中野晴久 1994 「生産地における編年について」『中世常滑窯をおって』資料集 日本福祉大学知多半島総合研究所

第1表 確認調査出土遺物観察表

番号	トレンチ名	種類	器種	高さ	流量 (cm)	口径	底径	残存率%	胎土	焼成	色調	調整・文様等	その他
1	4 T	S	高坪	(8.0)			12.2	15	密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
2	4 T	S	甕	(3.6)				10	密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
3	4 T	S	甕	(7.0)			6.0	10	密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、外面下部・底部回転ヘラケズリ	
4	5 T	R	明石	長さ11.8、幅7.8、厚さ2.8、重量370g								外面に打付蓋	
5	5 T	S	甕	(1.5)				10	密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、外面中央回転ヘラケズリ	
6	5 T	S	有台皿	3.8	24.0		17.8	30	密	良好	灰色	内外面回転ナデ、貼付け高台	
7	5 T	S	甕	(2.9)	15.0			25	密	良好	褐色色	内外面回転ナデ、外面中央回転ヘラケズリ、外面に重ね焼き痕(口縁部から内面にかけ焼灰色)	
8	5 T	S	甕	(1.4)	14.0			5	密	良好	灰色	内外面回転ナデ	
9	5 T	S	甕	(1.3)	14.4			5	密	良好	灰色	内外面回転ナデ	
10	5 T	S	坪	(2.9)	11.8		9.2	10	密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	
11	5 T	S	坪	(2.4)			8.4	10	密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部ヘラケズリ	
12	5 T	S	甕	(4.3)	8.0			5	密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
13	5 T	S	甕	(2.8)			6.8	10	密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部へら切り後ナデ	
14	5 T	I	鉄質	径2.4、厚さ0.1、重量2.2g									皇室通寶
15	8 T	S	高坪	(1.7)	14.0			5	密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
16	8 T	S	高坪	(3.8)	13.4			5	密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	

S:須磨器、R:石器、I:金属品

第2表 本調査出土遺物観察表

番号	遺構名	種類	器種	高さ	流量 (cm)	口径	底径	残存率%	胎土	焼成	色調	調整・文様等	その他
1	SE-1 T	甕	(4.6)	14.4		4.6	40	密	良好	淡褐色	内外面に回転ナデ、上部		
2	SE-1 T	鉢	(5.6)					密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、外面上部回転ナデ、下部回転ヘラケズリ、内外面に灰積、内面に一段に刷線輪	遺構IV	
3	SE-2 P	甕	(2.6)					密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部回転ホトリ、内面に自然磨、溜台のみ褐色	瀬美第1期	
4	SE-2 Z	縁餅弁文輪	(2.8)			5.8	10	密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、高台の端部は磨削、内面を見込みへらナデ	青磁	
5	SE-2 T	丸瓶	(5.2)	11.9			15	密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、外面下部回転ヘラケズリ、全体に鉄積	大塚	
6	SE-2 T	志野丸瓶	2.1	11.5		7.1	20	密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、全体に長石積、内面にトナリノ線	本郷第II段階	
7	SE-2 T	甕	(6.7)					密	良好	褐色色	内外面ヨコナデ、内面の口縁のみが厚塗	常滑11期	
8	SE-2 H	鉢	(3.8)	20.0			3	密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ、体部内面回転ナデ、外面ナデ	信濃窯	
9	SD-1 P	甕	(2.5)			8.0	5	密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ		
10	SD-1 S	甕	(3.9)					密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、内面に半土質の積合	瀬美第3期	
11	SD-2 T	丸瓶	5.5	11.4		4.0	50	密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、外部下部回転ヘラケズリ、全体に灰積	遺構V	
12	SD-2 T	縁餅輪	5.3	9.8		4.5	50	密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、内面と外面上部に灰積、外面下部に鉄積	遺構II	
13	SD-2 T	縁餅輪	4.9	9.4		3.9	50	密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、外面下部回転ヘラケズリ、内外面に灰積	遺構III	
14	SD-2 T	縁餅輪	4.1	9.7		4.0	60	密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、全体に灰積、後縁輪無し、掛け	遺構III	
15	SD-2 T	甕	4.5	9.8		3.7	40	密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、外部回転ヘラケズリ、貼付け高台	遺構IV	
16	SD-2 T	甕	5.4	10.2		3.6	40	密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	遺構IV	
17	SD-2 T	甕	5.4	11.2		4.6	40	密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、貼付け高台	遺構IV	
18	SD-2 Z	茶碗	5.7	7.6		2.8	70	密	良好	淡灰色	全体に透明輪	遺構IV	
19	SD-2 Z	茶碗	5.4	9.8		5.3	65	密	良好	淡灰色	全体に透明輪	遺構IV	
20	SD-2 Z	茶碗	9.5	10.7		5.2	50	密	良好	淡灰色	全体に透明輪	遺構IV	
21	SD-2 T	広東瓶	6.6	10.8		5.1	55	密	良好	淡褐色	全体に透明輪	遺構IV	
22	SD-2 T	広東瓶	(6.6)			7.0	60	密	良好	白色	内外面回転ナデ	遺構IV	
23	SD-2 T	鉢	(8.9)					密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、内面の口縁から外面に鉄積	遺構IV	
24	SD-2 H	焙烙	(3.0)					密	良好	褐色色	内面体部ナデ、口縁部ヨコナデ、外面の体部に指押さえ、底へらケズリ	外面に僅付蓋	
25	SD-2 T	縁餅	(12.0)	34.0			15	密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、外面下半および底部回転ヘラケズリ、内外面に鉄積	本郷第II段階	
26	SD-2 D	鉢	(13.0)	27.8			20	密	良好	茶褐色	内外面ナデ、口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	瓦室土器、外面に僅付蓋	
27	SD-3 T	菊まつ豆皿	(4.5)			6.0	30	密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、鉄積		
28	SK-1 T	甕	4.9	8.6		4.6	75	密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、外部回転ヘラケズリ、内外面に灰積	遺構IV	
29	SK-1 T	菊まつ豆皿	(1.5)			4.2	30	密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、鉄積、外面下半回転ヘラケズリ	遺構IV	
30	SK-1 T	鉢	(5.9)					密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、外面下半回転ヘラケズリ、内外面に灰積、内面に樹文状の刷線輪	遺構IV	
31	SK-1 H	皿	1.5	7.8			60	密	良好	淡褐色	内面回転ナデ、外面ナデ、指押さえ	内面にタール状の僅付蓋、内外面に僅付蓋	
32	SK-1 H	皿	1.8	10.0			60	密	良好	淡褐色	内外面ナデ、指押さえ		
33	SK-1 H	鉢	(7.4)					密	良好	褐色色	内面回転ナデ、口縁部ヨコナデ、外面ナデ、指押さえ		
34	SK-1 H	火鉢	(7.7)					密	良好	淡褐色	内外面ナデ、口縁部ヨコナデ		
35	SK-1 H	鉢	(4.9)					密	良好	淡褐色	内外面ナデ、外部回転ナデ、上側に刷線輪、外面から穿孔	鉢は三足か	
36	SK-1 W	漆器	(3.1)			5.6	15	密	良好	淡褐色	内外面ナデ、外部回転ナデ		
37	SK-2 H	皿	(1.6)	15.2			5	密	良好	淡褐色	内外面厚塗、底部外面に指押さえ		
38	SK-2 H	鉢	(3.0)					密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ		
39	SK-3 S	甕	(9.0)			7.8	90	密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、外部下半回転ヘラケズリ、体部外面の中心に磨の刺突、外面に自然磨		
40	SK-5 T	灯明皿	1.8	9.8		3.4	35	密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、底部ナデ、内外面に灰積、側面に鉄積	遺構VI	
41	SK-5 T	甕	4.1	長径12.3、短径3.9		80	密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、外部下半回転ヘラケズリ、体部外面の中心に磨の刺突、外面に自然磨			
42	SK-6 J	漆鉢	(2.5)					密	良好	明褐色	外面に漆文、厚塗が美しい		
43	SK-7 T	縁餅	(3.0)					密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、鉄積	大塚第II段階	
44	SK-8 Z	鉢	3.1	9.8		5.4	98	密	良好	白色	全体に透明輪		
45	SK-8 Z	鉢	(1.4)	12.0		8.4	7.8	10	密	良好	白色	全体に透明輪	
46	SK-8 Z	広東瓶	6.0	7.2		6.4	30	密	良好	淡灰白色	全体に透明輪	本郷第II段階	
47	SK-8 Z	坪	5.4	7.2		3.6	60	密	良好	白色	全体に透明輪		
48	SK-9 H	皿	(2.9)	12.8			15	密	良好	淡褐色	内面ナデ、口縁部ヨコナデ、底部ナデ、指押さえ		
49	美土 P	甕	(2.2)			7.8	15	密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、高台貼付け付(高台のみ褐色)	瀬美第2期	
50	美土 P	甕	(1.4)			8.6	15	密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、高台貼付け付	瀬美第3期	
51	美土 T	甕	長さ11.7、幅5.7、高さ1.4、重量163g										
52	美土 T	甕	(3.6)	13.6			3	密	良好	褐色色	内外面回転ナデ	常滑	

J:縄文土器、H:土師器、S:須磨器、P:山茶碗、T:陶器、Z:磁器、D:土製品、W:木製品、R:石製品

第5章 まとめ

羽根井遺跡は、平成10年度の豊橋市内遺跡詳細分布調査によって発見された遺跡である。付近はすでに宅地化が進んでいたが、遺跡自体の遺存状況は遺物採集の成果から比較的良好ののではないかと考えられていた。今回はその第1次発掘調査の報告である。

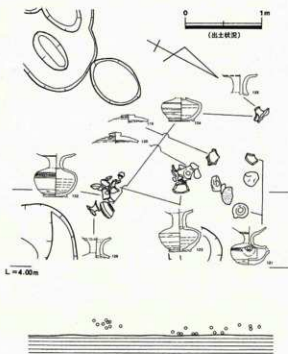
確認調査では、敷地の北端付近から8世紀の須恵器がまとも出土し、本調査でも同時期の遺構が多く検出されると考えられたが、意に反して戦国～江戸時代の遺構が主体であった。しかし現存集落の起源が、恐らく戦国時代まで遡ることが想定されることになった。

ところでこうした中で、わずかに1ヵ所ではあるが、古墳時代後期・7世紀中葉の土壌が1ヵ所検出された(SK-3)。直径37cmの柱穴状を呈したこの土壌からは、ほぼ完形に近い須恵器の甕1点が出土し、単なる柱穴ではないことが想定された。土器埋納遺構としてしばしば取り上げられるこのタイプの遺構は、おおむね祭祀遺構と考えられ、中には実際に柱穴として利用され、地鎮の意がこめられた場合がありうる。一方で建物とはまったく独立して存在する場合も見られる。本例がいずれに該当するかは調査区の関係から判断できないが、こうした祭祀に甕が使用されている点は注意すべきだろう。

浜松市・郷ヶ平6号墳で出土した人物埴輪(巫女)は手に甕を持っており、古墳時代の祭祀に際して液体を注ぐ行為が象徴的に行われていたであろうことを推定させる。祭祀遺跡から出土した土器を見ると、甕が特別に多く出土しているわけではなく、必ずしも祭祀を象徴する器というわけではない

だろうが、本遺跡のような特殊な用法はやはり祭祀行為を想定するのが妥当であろう。

ここで、同様に甕を使用した祭祀の痕跡のうち、同時期の例を紹介する。豊橋市大西遺跡は羽根井遺跡から西へ約2.5km離れた台地の西端付近にある。ここでは6点の甕と坏蓋2点が破砕された状態で出土した遺構Z-8区SX-1がある。明瞭な遺構の掘り込みは確認できず、2.5×1.5mの範囲内にある地山の直上に須恵器片が散布していた。類例はごくわずかながら、こうした須恵器を使用した祭祀が、同時期の同じ柳生川河口の遺跡において行われていることは注意すべきだろう。今後、甕を使用した祭祀遺構が周辺地域から検出されるだろうことは想像に難くない。祭祀行為の実態に迫りうる類例の増加が待たれるところである。



第13図 大西遺跡の甕を使った祭祀 (1/50)

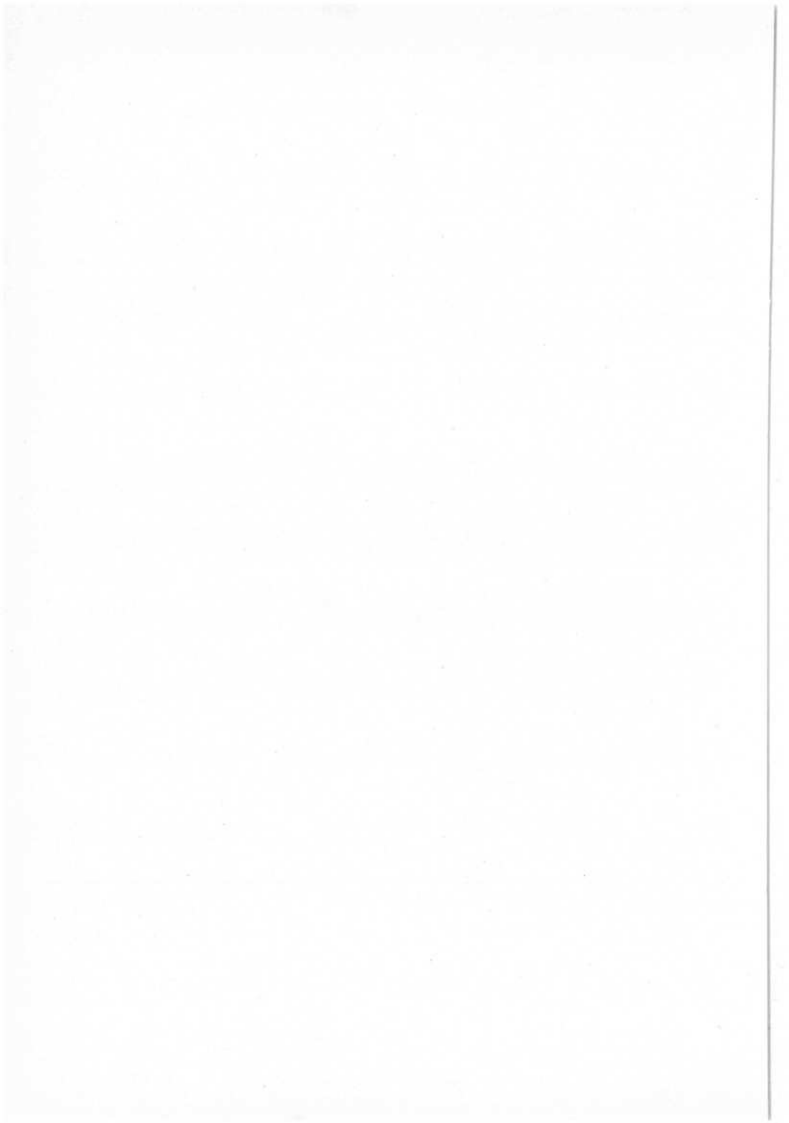
報告書抄録

ふりがな	はねいせき (いち)							
書名	羽根井遺跡 (I)							
副書名								
巻次								
シリーズ名	豊橋市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第77集							
編著者名	岩原 剛							
編集機関	豊橋市教育委員会							
所在地	〒440-0801							
発行年	2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査 期間	調査面 積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はねいせき 羽根井遺跡	とよはしはなだらよう 豊橋市花田町 あざうしろだ 字後田18-1	23201	79977	34度 45分 5秒	137度 23分 0秒	2003 0916 ~ 2003 1003	250	(株)スギ薬 局の店舗 建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
羽根井遺跡	集落	古墳時代 古代 中世 近世	土壌 井戸、溝、柱穴 井戸、溝、柱穴、 土壌	須恵器 須恵器 瀬戸美濃陶器、 青磁、土師器 陶器、磁器、土 師器	古墳時代後期の土 壌から、須恵器の 甕1点が出土し、 祭祀遺構と推定さ れる。			

写真図版



上空から見た調査区





1. 調査区北東角付近 (北西から)



2. 調査区東辺 (北から)



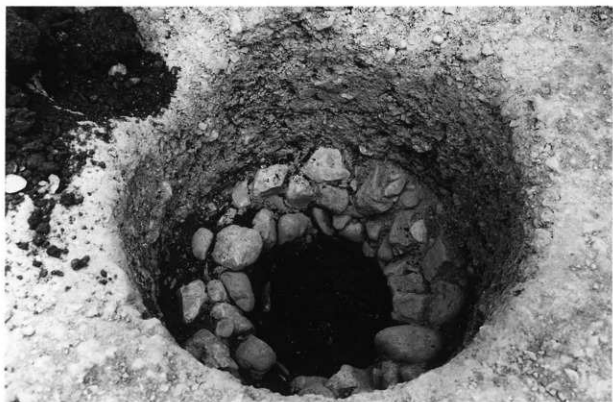
1. SK-3 礎出土状況-1 (東から)



2. SK-3 礎出土状況-2 (西から)



1. SE-2 (北から)



2. SE-3 (南から)





豊橋市埋蔵文化財調査報告書第77集

羽根井遺跡 (I)

2004年3月31日

発行 豊橋市教育委員会©
教育部美術博物館

〒440-0801 豊橋市今橋町3-1

印刷 大陽出版株式会社